

闘う教会 (THE CHURCH MILITANT)

鬼塚, 敬一
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5389>

出版情報 : 言語文化論究. 6, pp.169-182, 1995-03-10. 九州大学言語文化部
バージョン :
権利関係 :

闘う教会¹ (THE CHURCH MILITANT)

ジョージ・ハーバート (1593—1633)・鬼塚敬一(訳)

全能の主よ、御身は その莊嚴なる玉座より
万物を まさに等し並みに 見そなわし、統べ給う。
いと小さき蟻すら 極微の粒子さえも 主の御力を認め、
分秒のひとこまひとこますらもが それを識る。
国々には さらに深く 主を認めて、
己れの指針を 天命の内にくるみ、
御心に添うべく、とこしえの神慮に適わぬものは
何ひとつ 行わぬ。なかんずく、御身の教会とキリストは、
力の勅命ではなく、愛の絆を、証明する。
早々と 主は起きらせ給うた、この葡萄の樹²を 植えつけんがために。
それゆえに、この樹は それだけ一層
御身のものとならんことを 願い求めて止まぬであろう。
香料は東方より来る。御身の伴侶³も まさにそうであった。
光ようにすっきりと、ノアの陰深き葡萄樹の たわわに
実を結けた大枝のように芳しく、御身の伴侶は
鳩のように貞潔で、御身の愛を容れるに適わしく、用意も周到。
その辿る道筋は 西へ向っていた。太陽が 我らの視覚になすごとく
我らの悟性をも 明るく照らせるようにと。
ノアの方舟が止った その場所で、アブラハムは
カナンより⁴ 別の方舟、聖約櫃⁵を 運び始めた。
モーセが さらにこれを推し進めた。とはいえ、ソロモン王が
完成し、この旧き信仰を 確かと 定めた。
やがて それが揺らぎ始めるや、ユダヤ人は キリストを磔^{はりつけ}にして、
再度それを固定せんと 望むも、空しかった。
だが、キリストは 異教徒たちにも 十字架などをもたらし給うた、
地震によって 異教徒との隔ての壁を 取り壊すことにより⁶。

10

20

ただ、聖約櫃は 後光と共に照り輝いてはいたが、
 今や信仰は光輪もなく、牧杖を得たかのごとく、十字架をとり
 巡礼者然と、歩みつつ あらゆる家いへの戸を
 叩きながら、西方を指して 進み始めた。

30

しかし、太陽が 前へ進みながらも、己が背後に耳を傾け、
 すっかりその場を立去って了うまでは
 後に 幾許かの光を残すのにも似て、教会もそのように
 西漸の道を 歩み始めた。片方の足は 前に進めど、
 他方の足は いま暫し 東方の国ぐにの間に
 留まった、両足ともに 西の地へと移り去るまでは。
 エジプトへ まっ先に信仰はやって来た。そこでは、人びとは
 かつては怒りの、今では愛の、奇蹟を経験した⁷。

十戒はエジプトで 拡がり栄えた、
 昔あまたの激しい疫病が 猛威を振った以上にも。
 聖マカリウスや大アントニーなど 隠遁僧たち⁸が ファラオを
 モーセに変え、エジプトの歴史を一変させた。

40

イスラエル人の住まうゴシェンの地は暗闇。なのに エジプトは光輝に
 満ちあふれ、ナイル河は 奇怪な生き物ではなく 敬虔なイスラエル人を 生み落した⁹。
 力ある洗礼は 醜怪なものに代えるに 最高に役に立つひとびとを
 生み出す 素晴らしい威力を秘めているのだ。

御身の御計らいは、あゝ神よ、

私にとり、なんと貴いことか！ 誰か 御身に較べられよう！

信仰は そこから ギリシャへ飛んだ。が、ここでは、技芸が 信仰に
 あらゆる人びとの心のなかで 最高の地位を与えた。

50

学問は途方に暮れ、哲学は困惑しきり、
 哲学者たちは 漁師の網に捕えられた。

プラトンもアリストテレスも困却し、かくして再度、
 キリスト教の新しいアルファベットを学ぶため 頭をめぐらざるを得なかった。

祈りが 論理を その隠れ家の穴に追いつめ、
 それ故に (ergo) はアーメン (Amen) へと 変貌を余儀なくされた。

とはいえ信仰は、ギリシャからも、エジプトからに負けず 早々と、ローマからもまた
 両者に劣らず 忽々に、馬に跨り 出立したのだ。だが、
 エジプトでは より速く馬を駆り、

他より先に その定められた盛期を 終えた。ギリシャでの
 隆盛期も過ぎる頃には、信仰は ローマへと向かった、
 信仰を鎮圧せんとて、すべてを己が敵にまわした者共をば 征服しつつ。
 ローマの戦士も 最早 己れの後生大事な戦傷を 世にたたえ上げることもなく、
 キリストこそがより大きな傷を負われているのを 認めているかにみえた。
 主の深手は、伏兵のため 己れの樂園を喪った者の至福を、
 奪還せんとて 自ら進んでうけられたもの¹⁰。
 回心のローマ戦士¹¹の大きな心は 身をこごめ、主の遺灰より、
 欲望の強奪ならぬ、厳肅な悔い改めを 学びとる。いまや彼は
 己れの槍を断つ。身代わりに殺されたキリストの
 四肢¹²を 再び 刺し貫くことのなきようにと。
 羊飼いの牧杖は、^こ当地ローマでは 王笏ほどの威力を得るに到り、
 歳月に 新たな呼び名と数¹³とを 賦与した。
 だが、アレキサンダー大王の血を突如断たれたギリシャの人びとを
 慰めるべく、ローマ帝国は なおもギリシャの内にとどまった¹⁴。
 これら東西の帝国¹⁵にあっては、武勇と技芸とが 福音の到来に備えて、
 人びとの心を 慣らし 調律した。
 福音は、この両者を駆使しつつ、一方の技も 他方の力をも
 畏れることなく、その玉座を 打ち立てた。
 ローマ帝国は、(消滅するものの常ながら)、
 あまた 分裂と闘争にあけくれたが、
 かたや信仰は さらに西方へと移り 遂にはドイツへと逃げ来^{きた}って、
 そこで、教会の千(周)年の祝祭を待ち望んでいた。
 つまりは、以前 帝国と技芸^{わざ}が信仰の先導を果したように、(この両者以外の
 先導役など もの役には立ちまいゆえ)、なおも両者がそれを果たし、
 何処にて真っ先に 教会が その意気消沈^{こうべ}の頭を上げるべきか¹⁶、
 その場所を 我らに 指示することが出来るようにと。
 力が土地を均らし 技芸^{わざ}が¹⁷そこに 庭を造営する。すると、
 信仰が 慈雨を降らせ 万物に実を結ばせるという道理。
 スペインは 帝国¹⁸を ドイツと分かち合っていた。
 だが、イングランドは 更に崇高な勝利に与かった。
 教会が その地位を堅持し、以前より衰退することの
 なきよう、英国は 教会に 王冠を与えた¹⁹のだ。

60

70

80

90

コンスタンティヌス大帝に流れるイギリス人の血²⁰は、古来 この
真実を意味していた。そして 教会と国家との結びあいのこの神秘を、
一枚の紙片かみざれの内に 折りしたためたが、その一片²¹が
時の偉大な年代記クロニクルより引き裂かれ、ここ英国へと
送られてきた。かくして、教会も太陽も
ともに 絶頂へと駆け上ったのだ。

御身の御計らいは、あゝ神よ、

私にとり、なんと貴いことか！ 誰か 御身に較べられよう！

100

時と所もほゞ同じく、教会が その移動を
開始したその場所で しかもその時期、
罪も 東方のバビロニヤより 出立した。
これまた、西へ向った。罪は
旅をつづけつつ、足をのばすさきざきで、教会を追い立て
その平和を攪乱し、教会の美名に泥を塗った。
最初、罪は、エジプトにやって来た。そして罪が、神々の庭に
種を播くと それは毎年、鮮やかで見事な神がみを育ぐくんだ²²。
人びとは、甚大な損失を蒙った。明らかに、ひとりの神のため、
彼らは 一品の野菜サラダを失ったわけだから²³。

110

あゝ、神の恩恵なくば、人間も なんと生きるもの！
慎ましやかな顔をして 大蒜にんにくを崇めたて、
己れが食べる草木に 糧食かてを乞い求め、
自らの食べるべき物を 伏し拝みつつ、飢えるとは！
草の根を 己れの神とうち仰ぐ 人間の低劣さよ、
もしも神と人間ひととが 無限に隔てられれば！ 草箒は、ただ崇めまつる
のみゆえに、住居すまいはむかつくような汚れよう、これでは
どんな部屋とて、何というみじめさを 住むものになめ嘗させようぞ²⁴。

今日では 誰ひとり こんなことは信じまい。とはいえ、
お金こそは、我らのうちに移植された これと同じ愚劣なのだ。

120

こうして、しばしの間 罪は エジプトの内を忍び回った。
エジプト人にとり 最高位のものとは雄牛、あるいは鱈、
また いとも哀れな鳥獣たちであった。此処から、
罪は、ギリシャへと渡りゆく。善よりも 遙かに
狡賢い罪は 己が守備隊を後に留め置き、

日々自らが獲ち得るものを 確かなものにせんと 企らむ。

当地では、罪は 蛮勇を奮った。かくて

庭園の苗床の代りに、豪華な社殿と巫女たちを手中にした。

罪は ^{ギャラント}伊達男に変身したのだ。起るべき将来のことを

実際に生起した出来事も同然に、巧く予言せんと 念じあぐねた。

130

それどころか、詩人にまでも豹変した。まったく己れの猛毒を、かの甘ったるい糖衣にくるんで、人びとにふるまった次第²⁵。

この大変なおみくじに、人びとは財布と大金を両手に

やって来ては、皆がくじを引くのであった。

だが、すべては、輝くばかりのべてん、見事な欺瞞。そこには、

なにがしかの貧弱な真実が 密かに忍ばせてはあった、が

それは、彼（罪）を人に信じこませ、彼の後に来る もっと価値ある真実を

啓示する人びと²⁶を 信じぬようにさせんがための餌。

ギリシャから、罪は ローマへと渡った。以前 神であったように、

今や、彼は皇帝だ。そこでは

140

ネロや他の皇帝たちも 彼に豪華な宮殿をあてがい、

ローマ帝国の 版図の統治を委ねた。

栄誉こそが、古来 彼の駆使する主要な武器であったが、

その熱も冷めるや、快樂が 直ちに後に続いた。

それは間もなく、吹き煽られて 巨きな炎となったが、

そのさまは、われらの救主が 神託とその一切の財宝を放逐し

快樂に対抗するに苦難をもうけ その企らみを

打ち砕かれたとはいえ、なおも、或る詐欺師^{いかさまし}が²⁷

天上の官能的喜びへの期待を餌に、

こよなく勸鋭き国ぐにをすら 欺いたほど。

150

誰かあろう、エジプトやギリシャの人びとほどに、用心深く 洗練されたものが？

ところが、この古き異教徒たちも、彼らには信じ難い驚異とも映った

そんなマホメットの馬鹿げた教えの数々に、その摩訶不思議な

術に魅せられ、己れの心を入れあげてしまったのだ。

御身の御計らいは、あゝ神よ、

私にとり、なんと貴いことか！ 誰か 御身に較べられよう！

ただ 西方地域とローマのみが、この感染し易い背信から

人びとを救ってくれた。そして、これのみが、

ローマ教会が誇りうる ペテロの岩のすべてにすぎぬ²⁸、
ローマが或る日 苦い思いで 判るごとくに。

160

罪は ここローマでは、教会を根こそぎ出来ぬとみるや、
ある晩 自からも教会人となり、
司教冠を被らんと決意、この墮落しきった
老悪漢は もの書きに変身しようとした。

私は 彼が書齋にいる姿を見たが、先頃生起した論争に
余念なく、文机にむかっていた。ガウンとペンは、
彼には まさにぴったりのお似合い、
その重々しい面差しには、地獄よりも 天国が勝っていた。
ただ傍らには、一幅の 心をそそる絵画が掲げられ、
その方に 彼は流し目をくれていた²⁹。

170

罪は 以前ギリシャでは 予言者、
古代ローマでは 大皇帝であった。だが 今や
聖職者におさまって、かくて明らかに 彼は
キリストの三聖職務³⁰を まさに笑いのめさんばかりの心意気。
この感は一入^{ひとしお}。なにせ 今や 散在していた彼の
騙しの手口の数々が 時・空共に 一体の内³¹に合体されたがゆえに。

彼は エジプトからは ケチな神々、
ギリシャからは 神託の不膠性を、
そしてローマからは、教会の宝を気前よくばら蒔いて³²、
快樂の自由を、わがものとした。それから、

180

己れの古代の座所を偲び 自分の王宮に
バビロンというあざ名をつけた。
あらゆる種族の民どもを そのぶん巧みに惹きつけ、
彼らをそこへと移住させ、バビロンの名に背かぬことを実証出来ようと³³。

彼は これら到る地域から、時代はさまざまながら、
己れの罪悪を隠蔽せんため 立派な仮面を せしめた。
エジプトからは 世捨ての隠遁主義を、
ギリシャからは学問、ローマからは莊嚴を 取り込んだのだ、かくして
これらをつき混ぜあわせ、彼は 万人を瞠目させた。
その間 真理は 彼の勝利を数えつつ、傍にただ坐りこんでいるばかり。
このため 罪は急速に強大化し、その昔ユダヤの民を

190

虜囚にしたあのような暴力を行使するのを いまや潔しとせず、
 魔術をかけて 諸国の民びとを魅了し、自から進んで ローマに
 移り住むよう、巧妙に 働きかけた。ローマへと、
 あらゆるものが急いだ。諸もろの君侯たちも 彼のおおっぴらな威権³⁴、
 さもなくば 隠微な策略^{たくらみ}の前に、己れの首根っこを差し出した。
 動き巡ることは、彼の尊厳に適わしからず、
 長旅にも、彼の痛風や法衣の毛皮にとっても また然かりであった。
 かような次第^{わけ}で、彼は有能な使者共を 方々へ派遣した。
 彼らは、外見は修道僧、だが 中身は政治屋。
 槍や剣も用いず、舌先三寸のうち鳴らす ドラムの他には
 どんなドラムとともなく、諸国を制覇した。
 かくて、征服するや、まこと奇妙な統治を施したため、
 全世界が まさに教皇のスリッパ³⁵そのものにも見えたほど。
 新と旧のローマが 結び合って一大帝国を成したように、
 この両者は合わさって 一体の大アンチ・キリストを成す。もともと
 この古い罅入りの鏡の中には、ローマの
 ヤヌスの神さながらに、二つの顔が映ってはいた。
 御身の御計らいは、あゝ神よ、

200

私にとり、なんと貴いことか！ 誰か 御身に較べられよう！

210

かくして、罪は西のバビロン、ローマで 勝利を収めた。
 だがそれは、罪そのものとしてではなく 宗教としてであった。彼は、
 己れの二つの座所のうち、ローマを最高のものとした。そして、
 それに、東方からの己れの路銀を支払わせたのだ。
^ひ太陽と月が 天と光のものであるように、
 新と旧の両バビロンは 夜と闇のもの。
 一方が沈めば、他方が それに代わり、
 同じように 律法と恩寵のまえに 立ちはだかった。
 両者は地獄の標識、サタンの二重の紋章。
 東方と西方に 乳をあてがう 罪の両の乳首なのだ。
 しかし悪は 模倣の方が 原型をつねに凌駕するもの。
 だが、徳は さにあらず。
 かくて罪は、己が後の座所^{のち} ローマを、東方のバビロンよりもさらに
 悪の完璧に近づけたが、ローマ教会は 原始教会に 遠く及ばず。

220

エルサレムの第二の神殿も³⁶ 最初のそれに 及ぶこと^{あた}能わず、
 先頃の宗教改革も、古き より清浄な時代とは
 到底 較ぶべきもなかった。それゆえ、
 たゞ、ユダヤ人や我らの涙を そそののみだ。
 あまつさえ、教会は年を経る毎 痩せ細り 色褪せ、
 ついにキリスト再臨の際には、主が始めてこの世に來臨されたときと
 同じほどの暗黒が 定めし この世を深く覆っているよう。
 さらに、教会のこの縮小ぶりは、
 広大な世界とユダヤの一寒村との
 格差ほどにも 顕著なものとなるは必定。
 信仰は わが英国では 爪先立ちして、今にも
 アメリカの岸辺をさして 移りゆかんばかり³⁷。
 怨恨の極み、桁外れの止めどなき欲望、厚顔無恥の罪づくり、
 妖術、不信（将に來る破滅の^{しるし}徴候）が
 我らの杯を あふれんばかりに満し、
 そして 我らの裁きの秤りともなろう。
 セーヌ河がタイバー河を呑み込み、テムズ河が
 この両河を引き入れて、己れの流れを汚すとき、
 また イタリアが己れの意思を 我らにたいし押し通し、
 己が罪の^{カレンダー}予定表を そっくり実行に移すとき、
 これに抛り人びとは、どんな罪が 翌年は
 フランスと英国の双方で 我もの顔に跳梁するかを 予言することもできる次第。
 かようなときこそ、信仰は アメリカ目指して 逃げ出すだろう。
 かの地の人びとも、まさに我ら同様、自らの福音の^{みよ}時代をむかえるわけだ。
 わが神よ、御身はまず、新大陸の有てる金を運び去り、
 かの地の人びとに 信仰への道を用意なされた。
 なにせ、金と恩寵とは 未だ睦み合うものではなかったゆえに。
 信仰は 常に貧き側に加担するもの。
 我らは、己れが彼らより奪っていると思ひ込む、が、この考えは間違いなのだ。
 我等の掠奪により、我らはますます貧困へ、彼らは一段と豊かに成るのだから。
 御身は 彼らの不和に対して恨みを晴らされ、み恵みをもって
 我らの借金^{かり}を支払い給い³⁸、代りに、恩寵を その古き居場所を離れて
 彼らのもとへと 赴かせられ給う。ただし、彼らの国が今 我らに

230

240

250

貸し出すに過ぎぬものは、必ずや 我々自身の破滅の因ともならん。

だが、教会が西の方へと駆けゆくにつれ、

罪もすぐさま 執拗にその跡を追い、つけ回す。

260

西方の国々にも、己が時代を有ち、

有徳の行為と罪悪との双方に 時をあてがう。

古くはまた 帝国と技芸が つねに

人びとの心に 福音を迎え入れたが、

スペインは 己が流儀で行なった。が、その術技が帝国の力を用うれば、

教会は到来するも、罪が 定めしそれを窒息死させてしまおう。

教会も罪も その世界一巡を終え、

東方で、己が当初の 古しえの入江港にめぐり遇えば、審きが
この両者を出迎え、詳びらかに取り調べることも 出来えよう。

かように、太陽と同じく 教会においても、真理と信仰の

270

両の光は 互いに照らし会い、相伴れだつて 進みゆく。

かくてまた、罪と闇は たえず、有らん限りの技と力を尽して

教会と太陽の跡を追う。だが、太陽が

つねに西へと進みつつも 東へと向うごとく、

そのように教会もまた 西へ移りつつ たえず東へと赴く。

なぜなら、教会は 審判が必ずや現れる時と所へ

より一層 近づいたわけだから。

御身の御計らいは、あゝ神よ、

私にとり、なんと貴いことか！ 誰か 御身に較べられよう！

279

跋 (L' Envoy)

栄光の王よ、平和の王よ。

一方の手で、戦さを止めさせ給え。

他方の手では、御身の羊たちを 祝福し給え、

御身を愛し 御身のうちに眠れますよう。

罪が 自慢気に かように嘯きながら、御身の羊の群を

5

むさぼり喰うのを 許され給うな。御身の血潮は冷たい とか、

御身の死は、罪が 征服を拓げゆく限り

また 無駄^{じに}死ななのだ、とか、
 御身の身体^{からだ}は 生きる糧をすでに失ない、
 御身の十字架も たゞの木片^{こっば}だ、とか。
 奴の息を詰らせ、これ以上嘯くのを 押し止め^{とどめ}、
 奴に 己が息を 大切に 蓄えさせ給え。
 御身の征服と彼奴^{あいつ}の墜落のゆえに、
 奴の溜息が、息の蓄えを すっかり使い尽くし、
 果ては、その不足をまかなうために、吹く風に
 助けを 求めゆくまで。

10

15

ひとり 神の崇めまつられんことを
 いとも聖なる 三位一体の神のみが。

完

訳 注

- (1) The Church Militantの訳語だが、天上のキリスト者たちと対照的に、地上にあってい
 なお、苦闘を続けているキリスト者全体を意味する。
- (2) キリストとキリスト教会をここでは同時に意味するものと思われる。なお8行目で「キリス
 ト」と訳した原語は Spouse である。
- (3) 従来、キリストを意味するメタファとして、葡萄樹、葡萄の実、ワインなどが度々用いられ
 てきた。ここではキリストのみではなくむしろ、信仰、教会をも含意する。
- (4) Williams 手稿では、ここは“to Canaan”となっていて、この方がずっと理解し易い。だが他
 の手稿、版などはすべて“from Canaan”となっている。よって拙訳ではこの方を採った。恐ら
 くアブラハムのエジプト下り（創世紀12:10）をハーバートは念頭においていたのだろうか。
- (5) 原文では‘the other Arke’とだけある。むろん、the Arke of the Covenant のことであるの
 で、この訳語をつけた。「聖約櫃」とはイスラエルの民が荒野をずっと運びまわり、モーセがエ
 ジプトの地よりカナン^{カナンの地}の地につれ戻さんと努め、ついにはソロモン王が新築のエルサレム神殿
 に安置したもの。次の二行参照。
- (6) キリストが十字架で息を引き取った時、エルサレム神殿の垂れ幕が真っ二つに裂け、地震が

起こり、岩が裂けた (マタイ27:51)。また、主は二つのものを一つにし、自らの内において敵意という隔ての壁を取り壊し、律法を廃棄された。即ち十字架を通して、イスラエルの民と異邦の民の両者を、一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされた (エフェソ 2:11-16)。

- (7) エジプトの原始宗教では、神はしばしば自分の怒りを、疫病、飢饉、その他の災害という形で表わし、住民をこらしめるものと考えられた。それが今や、愛を説くキリスト教がアレキサンドリアを中心に栄えて、ここの教会は当時のローマ教会、コンスタンチノーブル教会にも匹敵するほどの勢力を有していた。
- (8) 二人とも四世紀エジプトのキリスト教徒の隠遁僧で、当地の修道院制度の創設者。
- (9) ナイル川の泥はかつてはワニや蛙の群れを生みだしていたが、今やナイルの流れで人々は洗礼をうけて、新たにキリスト者として生まれかわる。
- (10) アダムとイブが、サタンの化身した蛇 (伏兵) の罠にまんまと陥り、神の賜物、エデン楽園を喪失した。だが、その至福の楽園を再度奪還せんとして、キリストは自ら進んで十字架に上り、槍で刺し貫かれた。
- (11) ローマ帝国の皇帝として最初にキリスト教に回心したコンスタンチヌス大帝を暗示するか (?)。むしろ、異教的、軍事的英雄に対峙する、キリスト教的忍耐を表わす一つの人物定型とも考えられよう。
- (12) キリスト教徒の意。つまり、キリストの体としての教会、そしてその教会を構成する信者たち、のこと。
- (13) 従来 of 異教 (徒) の祝祭日に代って、新たにキリストや聖者を祭る祝祭日を定めた新しいキリスト教の教会暦が出来上った。
- (14) アレキサンダー大王の急逝により、大王の帝国は分裂したが、コンスタンチヌス大帝がローマ帝国の首都をローマからビザンティウムに移したので、教会の栄光は生きのびえた。
- (15) 東、西のローマ帝国の意。
- (16) 宗教改革が何処で最初に開始されるべきか、という意。
- (17) Art の訳語だが、多くの注釈者は (Hutchinson なども含め) もっと狭く <芸術> の意味に解釈しているようだ。<芸術> をも含めて、さらに広くキリスト教の伝導・伝播に寄与した諸々の人間の技、術、学芸をも総括して <技芸> と訳した。他の箇所 of <技芸> も同じである。
- (18) 神聖ローマ帝国のこと。ドイツとスペインはこの帝国を支える二大国であった。
- (19) 英国の宗教改革では、国王ヘンリー八世が教会の首長となり、英国国教会をつくり、国教となして、国家 (王冠) と教会を合体させた。
- (20) ローマ皇帝のなかでも最初にキリスト者となりそれを公認して、キリスト教をローマ帝国 of <国教> とした大帝は306年に英国のヨークで戴冠した。さらに彼の母ヘレンはイギリス人と

言われている。

- (21) 教会（ローマ教皇）に大幅な世俗的権限を認めた、あの‘Donation of Constantine’というものが書き記された文書のことか。これが英国へと送られて来たとは、英国国教会における、教会と国家との神秘的とも言える結びつきの存在を暗示する。
- (22) キリスト教伝播以前のエジプトでは、それぞれの地域で、樹木、草木、動物などに守護精霊が宿ると考え、これらを神格化し崇拝していた。
- (23) 古代エジプトで玉葱が崇拝されていたということをハーバートやグンは耳にしていたようだ。グンの *Of the Progress of Soul: The Second Anniversary* の中にも、「ワイン、小麦、玉葱が彼らに神であるように」という一行（II. 427-8）が見出される。神ともなれば玉葱をサラダにして食べることはばかられる、という次第。
- (24) 草箒の素材の植物を神として神格化し、崇め立てていたため、本来の掃除のために草箒を用いず、そのために、部屋が汚れ放題になったこと。
- (25) ギリシャの巫女たちの神話はしばしば韻文で記された。その甘い韻文の調べの内に恐しい毒ともいえる内容を盛り込んだ。
- (26) 異教徒の間に、キリストの来臨を予言したと言われるシビルの巫女たちを指す（パーマー説）。
- (27) 後の行からも判るように、マホメットを指す。コーランは天上の快樂を約束している。
- (28) 法王（ペテロ）を教会の首長と仰ぎ、その無膠性という岩の上に自らが立つと宣言して止まぬローマ教会。その教会が果たした功德と言えば、マホメット教からキリスト教会をかるうじて護ったという消極的な一事だけだった、の意。
- (29) ローマ教会における法王を始めとする聖職者の信仰の不純性を、ハーバートはこのように点描する。
- (30) 予言者、司祭、王。この三聖職をキリストは兼務するといわれる。罪によるこの三聖職の茶番化がいかにローマ教会で生じたかが次に描かれる。
- (31) ローマ教会とその高位聖職者たち、特にその頂点にたつ教皇を暗示する。
- (32) ローマ教会の乱発した特免(状)や贖宥しよくゆうをさす。これにより教会は多額の金銭を得た。
- (33) 人びとがバベルの塔を建てたため、結局は主により全地に散らされたが、ちょうどその逆に罪は、あらゆる地域からローマ（バビロン）に人々が移住してくるよう働きかけた。ローマはアンチ・キリストの都というのみならず、言語の混乱の統一者としても西方のバビロンという異名に恥じない。
- (34) 原語は‘his public foot’。教皇に謁見するとき、人びとがそのサンダルをはいた教皇の足にキスをした、ということをも暗示する。法王権絶大の頃の12世紀末、フレデリック皇帝の頭上に教皇がその足を置いたとの言い伝えなども含意。勿論、すぐ後の(教皇のスリッパ(The Pope’s

mule)) とも呼応する語句。

- (35) この意味の他に、教皇が思いのままに乗りまわす驢馬の含意もある。
- (36) バビロン捕虜からイスラエルへの帰還後に、彼らはエルサレムの昔の神殿のかわりに、第二の神殿を新たに建てた。(エズラIII: 8-12)
- (37) ニコラス・フェラーがハーバートの死後ほどなくして、遺稿 *The Temple* を上梓すべく、ケンブリッジ大学当局にその出版許可を求めたところ、この二行があるため、当局は暫時、その許可をためらった、というウォルトン伝えるエピソードは有名。ただ、真の信仰が欧州、英国を離れて、新大陸に移りゆくのでは、という考えは、当時の英国では、殊更に珍しくもなく、幾人ものひとが説いていた、かなり一般的な思潮でもあった。
- (38) ここはパーマーの解釈では次のようになる〈我らの取奪とひきかえに、神は彼ら(新大陸の民)には恵みをあたえつつ〉。

後 記

ここに試みた翻訳は、17世紀初期の聖職者にして宗教詩人ハーバート (George Herbert) の詩集、*THE TEMPLE* の第三部を成すものである。この詩集は1633年、詩人の死後親友N. フェラー (Nicholas Ferrar) の尽力により、上梓されたが、三部より構成され、その第一部が同誌前号 (No. 5) に発表された「教会の袖廊」(The Church-Porch) である。本体部とも言うべき第二部は宗教叙情詩約160篇を編んだもので、1986年にすでに南雲堂より『ジョージ・ハーバート詩集一鬼塚敬一訳一』という表題で翻訳出版されている。こうして第三部に当たる部分がこの試訳「闘う教会」(The Church Militant) である。これで *THE TEMPLE* が完訳されたことになる。

三部とも各々独立の詩篇とも言える程に内容、詩形、韻律、トーン等で大きく異なるが、この第三部は、スタンザ形式をとらず、(但し、ほぼ等間隔に5回のリフレインの挿入がある)五歩格カプレットの対句で279行から成る哲学的省察を基調にした物語詩である。その内容は極く大まかに言えば、信仰(教会)とその跡を執拗に追いつがる罪、この両者の東方の地オリエントでの発生より始まり、その西方への道行きを順次エジプト、ギリシャ、ローマ、ドイツ、英国、さらに海を渡り新大陸へと、はるか辿りゆく。そしてついには最後の審判のとき、教会も罪も再び東方で主と相まみえるという、謂ば円環をなし、同時に完全性と永遠性を作品の内容自体が自ずと象徴する仕組みにもなっている。

恐らくダン (John Donne) の *Second Anniversary* などの影響をかなり受けていると思われるが、この三部の中では恐らく最も初期に属する作品であろうと一般に言われている。試訳の際、底本としては F. H. Hutchinson 編の *The Works of George Herbert* (1941, Oxford) を使用したが、同時に G. Palmer 編 (1915), A. B. Grosart 編 (1874, Reprinted 1982), J. H. Summers 編

(1967, Signet), C. A. Patrides 編 (1974, Everyman), L. C. Martz 編 (1986, Oxford. U. P.), B. K. Lewalski & A. J. Sabol 編 (1973, Odyssey Press), J. Tobin 編 (1991, Penguin), の各版をも同時に参照した。